（高知版）　2024年（令和6年）10月13日（日曜日）　讀賣

「願い通じた」「大きな励み」

被団協 平和賞 一夜明け、県内喜び

被爆者団体の全国組織「日本原水爆被害者団体協議会（被団協）」のノーベル平和賞受賞から一夜明けた12日、県内の被爆者や関係者からも喜びの声が上がり、核兵器廃絶に向けた願いを新たにした。

被団協に属する「県原爆被害者の会」で事務局長を務める宅間明亜（あきえ）さん(82)は11日夜、高知市内の自宅で受賞を知り、「努力や苦労が報われて良かった」と感じたという。

3歳の時、広島で被爆。家族と移り住んだ高知で20年近く、核兵器廃絶を訴えて活動してきた。一方で終戦から79年が過ぎ、高齢化で会員も約40人まで減少。後継者問題を抱えながらも、平和を求める声を上げ続けてきた。

それだけに今回の受賞を宅間さんは、「（平和への）願いが通じた。高齢化で会の存続も難しいが、核兵器廃絶に向けた未来や希望が見えてきた」と受け止めた。

太平洋マーシャル諸島・ビキニ環礁周辺での米国の水爆実験で被爆したと訴えるマグロ漁船乗組員と遺族らを支援する「太平洋核被災支援センター」の山下正寿事務局長(79)（宿毛市）は、被団協のメンバーとも交流が深いという。「世界に核兵器の非人道性を深く広く伝えてきたことが認められた。私たちにも大きな励みになる。非常にうれしい」と喜んだ。

その上で「日本は核兵器禁止条約に署名・批准していない。今回の受賞で、唯一の被爆国としての日本は、世界の声に応える責任が問われている」と訴えた。

高知新聞　2024年10月18日

核廃絶の祈り

清久 美智子 76（高知市潮見台）

「被団協（日本原水爆被害者団体協議会）ノーベル平和賞」。10月12日のトップニュースにくぎ付けになりました。1945年、広島・長崎に原爆が投下され、推定12万人の住民が殺害されました。受賞は核なき世界へ向けた闘いの強力な援護となるでしょう。

授賞理由に「肉体的な苦痛と痛切な記憶にもかかわらず、大きな犠牲を伴う自らの体験を、平和のための希望と活動にささげることを選んだすべての生存者に栄誉を授けたい」とあります。

平均年齢85歳を超える被爆者は「生き証人」として、核廃絶運動を先導してこられました。心から敬意を表したいと思います。今も地球上では、核威嚇を繰り返す国が存在します。核兵器廃絶こそが、平和への近道だと確信しています。

ここ高知でもビキニの水爆実験の被害者が存在したのです。1954年、ビキニの海で操業していた高知のマグロ船も被ばくしました。死の灰の降り注いだ海、多くの人、魚が被災しました。

しかしその事実は長い年月、封印されたのです。その重い扉を開いたのは幡多ゼミナールの高校生たちでした。声なき声に懸命に耳を傾けてきた高校生たち。「慟哭（どうこく）の海から非核の海へ」―。この活動は今大きなうねりとなり「ビキニの海からの証」と題した演劇が11月30日、高知県立美術館ホールで行われます。非核の思いのこもった演劇をぜひ、ご覧いただきたいと思います。

（声・ひろば）